

# スミス『国富論』とマーシャル『産業経済学』：生産と分配

関西外国語大学英語キャリア学部教授

滝川好夫

- 1 はじめに
- 2 富：スミスのGDP vs. マーシャルの物的富・非物的富
- 3 「スミス vs. マーシャル」の「生産的労働 vs. 不生産的労働・非生産的労働」
- 4 「スミス vs. マーシャル」の「分業のメリット・デメリットと『特化されている労働技能 vs. 特化されていない労働技能』」
- 5 労働と資本：スミス vs. マーシャル
- 6 「スミス vs. マーシャル」の分配
- 7 労働と賃金：マーシャルの「未熟練労働 vs. 熟練労働」
- 8 「スミス vs. マーシャル」の賃金格差
- 9 「スミス vs. マーシャル」の資本・利子
- 10 おわりに

## 1 はじめに

アダム・スミス『国富論』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*)の初版は1776年、アルフレッド・マーシャル『産業経済学』(*Economics of Industry*)の初版は1879年にそれぞれ刊行されている。

本稿では、スミス『国富論』とマーシャル『産業経済学』に基づいて、「スミス vs. マーシャル」について、第2節では「富」概念の違い、第3節では「生産的労働 vs. 非生産的労働・非生産的労働」概念の違い、第4節では「分業のメリット・デメリットと『特化されている労働技能 vs. 特化されていない労働技能』」の違い、第5節では「労働と資本」の違い、第6節では分配の違い、第7節ではマーシャルの「未熟練労働 vs. 熟練労働」、第8節では賃金格差の違い、第9節では資本・利子を検討する。

## 2 富：スミスのGDP vs. マーシャルの物的富・非物的富

現代経済学では、一国の経済の大きさはフロー（期間）の次元では「GDP（国内総生産）フロー」、ストック（時点）の次元では「国富ストック」を用いてそれぞれ測られる。

『国富論』の「国富」の論は、現代経済学の用語法では、「一国のGDPフロー」の論であり、「資財」は3種類に分けられている。すなわち、人は現在の楽しみか、将来の楽しみ（利潤）かのどちらかを手に入れようとし、現在の楽しみを手に入れるのであれば「直接の消費のために留保される資財」を用い、将来の楽しみ（利潤）を手に入れるのであれば「資本」を用いると論じている。収入（利潤）を得ようとする資財は「資本」と呼ばれ、使用者に利潤をもたらす方法の違いによって、資本は「流動資本」と「固定資本」に分類されている。

「直接の消費のために留保される資財」は、消費者によって直接の消費を充足するために購入されたものの、まだ消費しつくされていない資財（食物、衣服、家庭用器具など）であり、それから収入を得ようとは考えない資財である<sup>1</sup>。

「固定資本」は、持ち主を換えることなしに、つまり流通することなしに利潤をもたらすものであり、「流動資本」は、持ち主を換えることによるのみ、つまり流通することによるのみ利潤をもたらすものである。

『国富論』は、「固定資本」を以下の4項目に整理している（訳書第2篇 pp.517-518）。

- (1) 「労働を容易にし、また短縮するすべての有用な機械や事業上の用具」
- (2) 「利益のあがるすべての建築物、(中略)たとえば店舗、倉庫、仕事場、農舎、お

---

<sup>1</sup> ただし、スミスは、1人の個人にとっては、家屋・衣服・家具などは、賃貸しによって利潤（収入）を得ることができるという「資本」としての機能を果たしうるものであると論じ、しかし、「家屋というものは、(中略)公共社会にとってはなんの収入ももたらしえないし、また資本の機能も果たしえないのであって、人民全体の収入がそれによって少しも増加することなどありえないのである。」（訳書 第2篇 p.516）と述べている。

よびそれらに必要な畜舎や穀倉などの建築物」

- (3) 「土地の改良、すなわち土地を開墾し、排水し、囲い込み、施肥を行なって、耕作や栽培に最もふさわしい状態にするために、利益をめざして投じられたもの」
- (4) 「社会の全住民または全成員が獲得した有用な能力（中略）いわば、かれの一身に固定され、実現されている資本」

『国富論』は、流動資本を以下の4項目に整理している（訳書第2篇 pp.518-519）。

#### (1) 「貨幣」

貨幣によって、他の3つの流動資本項目が流通し、それぞれ最終使用者または最終消費者（本来の消費者）の手に分配される。

#### (2) 商人の手元にある食料品

「食料品のストック（中略）これは、肉屋、牧畜業者、農業者、穀物商人、醸造業者などが所有し、そしてかれらはそれらの販売によって利潤を得ることを期待している。」

#### (3) 商人の手元にある材料

「衣服・家具・建物の未加工の材料、または多少とも加工された材料のうち、そうした3つの形態のどれにもまだ仕上げられていなくて、栽培者、製造業者、織物商、服地商、材木商、大工、指物師、煉瓦作りなどの手にとどまっているもの」

#### (4) 商人の手元にある完成品

「完成品となつてはいるが、まだ商人や製造業者の手にあつて、本来の消費者に売却されたり分配されたりしていない製品（中略）たとえば、われわれが、鍛冶屋、家具屋、金匠、宝石商、陶器商などの店に既製品としてしばしば見かける完成品」

『産業経済学』は経済学の主要テーマの1つは「富」と論じ、富を「物的富」と「人間的あるいは非物的富」に分類している。「物的富」は「誰かに帰属させうる、それゆえに交換されうる、楽しみの中の物的源」（訳書 p.7）、「人間的あるいは非物的富」は「直接的に生産に携わる人間の作業能率を高め、したがってかれらの物的富の生産力を高める人間のエネルギー、能力、肉体的、精神的、道徳的慣習」（訳書 p.7）である。物的富は、所有され、交換されるものであり、「楽しみの中の物的源」である。人間的あるいは非物的富は、物的富（楽しみの中の物的源）を生産する「人間のエネルギー、能力、肉体的、精神的、道徳的慣習」つまり、労働者の体力、知力、精神力、道徳力で

ある。

かくて、「富」概念の「スミス vs. マーシャル」の違いは、スミスは富を「直接の消費のために留保される資財」「流動資本」「固定資本」に分類し、マーシャルは「物的富」「人間的あるいは非物的富」に分類していることであるが、スミスの「直接の消費のために留保される資財」「流動資本」「固定資本の一部」はマーシャルの「物的富」であり、スミスの「固定資本の一部」はマーシャルの「人間的あるいは非物的富」である。マーシャルの「人間的あるいは非物的富」の中の「精神的、道徳的慣習」（労働者の精神力、道徳力）はスミスの『道徳情操論』をスミス以上に受け継ぐ概念である。

### 3 「スミス vs. マーシャル」の「生産的労働 vs. 不生産的労働・非生産的労働」

現代経済学ではモノの生産も、サービスの生産も価値の創造とみなしているが、『国富論』はモノの生産のみを価値の創造とみなし、価値を生産する労働を「生産的労働」、価値を生産しない労働を「不生産的労働」とそれぞれ呼んでいる。1人の「生産的労働」（例えば、製造工の労働）の生産物の価値＝「加工する材料の価値」＋「自分自身の生活維持費の価値」＋「雇主の利潤の価値」であり、1人の「生産的労働」の付加価値（価値創造）は「自分自身の生活維持費の価値」と「雇主の利潤の価値」の合計である。「自分自身の生活維持費の価値」は1人の生産的労働者が雇主（資本家）から前払いをしてもらっている賃金である。『国富論』は、モノの生産のみを価値の創造とみなし、サービスの生産を価値の創造とみなしていないので、1人の「不生産的労働」（例えば、家事使用人の労働）の生産物の付加価値＝0であり、1人の不生産的労働者は「自分自身の生活維持費の価値」を創造できないと論じている。スミスは、生産的労働者は対象に労働を投じ、投入労働の価値（生活維持費）を回収できるが、不生産的労働者は対象に労働を投じて、何らの価値を創造しないので投入労働の価値（生活維持費）を回収できないと論じている<sup>2</sup>。

『国富論』は、生産的労働者は勤勉である、不生産的労働者は怠惰であると指摘し、第1に「生産的労働の維持に充てられる基金」（賃金）が優勢なところでは勤勉が広がり、「不生産的労働の維持に充てられる基金」（利潤・地代）が優勢なところでは怠惰がはびこる、第2にGDPは賃金、利潤、地代に分配されるが、賃金への分配を多くすれば生産的労働者の割合が増え、利潤・地代への分配を多くすれば不生産的労働者の割合が増える、と論じている。

『産業経済学』は、「生産的労働は、通常、非生産的なものから、明瞭に引かれた線によって、区分されうるものではない。聖職者は往々にして非生産的労働者として分類されるが、もしも道徳的影響を及ぼすことにより、労働者をより謹厳、正直、勤勉

<sup>2</sup> スミスによれば、不生産的労働者の労働にも価値があり、労働投入に対しては報酬を受けるべきものである。

にするなら、かれはそのかぎりでの富について生産的である。またある種のレクリエーションは、労働者が最高の能率を発揮するためには必要であるゆえに、音楽家が間接的に一国の富を増進させ、間接的に生産的であることは充分ありうることである。」(訳書 p.8)と述べている。すなわち、「生産的労働」は直接的に物的富を生産し、「非生産的労働」は実は「人間的あるいは非物的富」を生産することがあり、そのことにより間接的に「物的富」を生産しているので、「生産的労働」と「非生産的労働」は明瞭に引かれた線によって区分されえない、と論じている<sup>3</sup>。

『産業経済学』は、「生産的」という言葉は富の生産性を意味するものであると指摘し、一国の富は、自然力と人力の共働によって生産されると論じている。富を生産する際、人間は自然が供する事物(鉄、石、木などの物質、風力、太陽熱のような他のあらゆる力の源となるような自然力)に働きかけるが、「人手がなしうるのは、せいぜい事物を動かすことである。(中略)言葉の厳密な意味において、かれはつくったり、創造したりすることはなく、ただ配合する。」(訳書 p.10)と述べ、「生産は創造を意味せず、ただ再編成だけを意味するがゆえに、ある人々が考えていたように、財の運送・販売にかかわる者たちの仕事は生産的ではありえないと想定することは誤りである。」(訳書 p.10)と述べている<sup>4</sup>。

かくて、第1に『国富論』は、モノの生産のみを価値の創造とみなし、サービスの生産を価値の創造とみなしていないが、『産業経済学』はモノの生産とサービスの生産をともに価値の創造とみなしている。第2に『国富論』は、モノを生産する労働を「生産的労働」、モノを生産しない労働を「非生産的労働」とそれぞれ呼んでいるが、『産業経済学』は、モノ・サービスを直接的に生産する労働を「生産的労働」、「人間的あるいは非物的富」を生産することによってモノ・サービスを間接的に生産する労働を「非生産的労働」とそれぞれ呼んでいる。第3に『国富論』は生産・運送・販売のうち生産のみを「生産的」とみなしているが、『産業経済学』は生産・運送・販売のすべてを自然によって与えられたものを、人間にとってより有利なものに変えることに貢献しているという意味で「生産的」とであるとみなしている。

#### 4 スミス vs. マーシャルの「分業のメリット・デメリットと『特化されている労働技能 vs. 特化されていない労働技能』」

『国富論』が取り上げている理論問題は「生産→分配→支出→生産」といった経済循環の中の生産・分配の問題である。スミスは、資本蓄積の前は、GDP(経済全体

<sup>3</sup> 『産業経済学』は、「人間的あるいは非物的富」は労働生産性を高めるが、「福利」(「持つことが有利である、あらゆる人間の能力や資性、さらにはその他のあらゆる享樂の源泉」：訳書 p.8)は労働生産性を高めないと論じている。

<sup>4</sup> 人力は自然力の様相を変え、また、自然力は人力の質を変える。天候は自然が与える賜物のうちもっとも重要なものの一つであり、極暑・極寒は人間を消耗させ、生産における人間労働の効率性を低下させる。

の財の生産量・供給量)は「国民の労働がふつう行なわれるさいの熟練、技能、判断力の程度」と「有用な労働に従事する人々の数」(訳書 序論 p.23)に依存していると論じている。すなわち、「 $GDP = (GDP / \text{労働量}) \times \text{労働量}$ 」の分析枠組みで言えば、GDPは労働生産性(GDP/労働量:労働の熟練、技能、判断力の程度)と労働量によって決定され、『国富論』の最重要テーマは「労働生産性はいかにすれば向上するのか」である。

『国富論』は、分業による労働生産性向上の理由として、「分業を行うことによって、労働者の技能は向上する。つまり、分業により、各人の仕事は単純な作業に還元され、また単純化された作業がその人の生涯のただ一つの仕事になるので、労働技能は必然的に増進する。」「1人の人がいくつかの作業を行うと、1つの仕事からもう1つの仕事へと移るときに時間のロスが生じるが、分業を行うと仕事を変える時間のロスがなくなる。」「分業は労働生産性を向上させる機械類の発明を促進する。」といった3つを挙げている。

『産業経済学』は、分業のメリットは、一人の人間がつねに自らに合った最高度の仕事に従事しつづけることによって得られる「技能の経済」「精神的・肉体的卓越の経済」「発明の経済」であり、分業のデメリットは、第1に「ただひとつの業種にのみ利用できる技能をもっている者は、その業種が不況になったり、あるいは、その技能が機械に代替されると、大きな被害を受けざるを得なくなる。」(訳書 p.70)、第2に「絶えざる肉体の緊張ないし悪環境での長時間作業をとまなう労働の場合、この単調さは極めて大きな弊害である。」(訳書 p.70)である、と論じている。

『産業経済学』は、労働者の肉体的、知的、精神的、道徳的な資質は、1つは生まれつき、もう1つは若い時代の家庭環境によって決まると論じ、「特化されておらず、多くの業務に利用しうる産業的資質と、一つの業務に特化されている資質とを比較するならば、後者に比して、前者の重要性が高まっていることに気付くだろう。」(訳書 p.137)と述べ、「特化された資質」と「特化されていない資質」を区別し、「特化されていない資質」がより重要であると論じている。また、「特化されていない資質」を「新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができる資質」(訳書 p.138)と説明し、「特化されていない資質」を修得している優れた労働者は、容易に他の業種へ移ってゆくことができると論じている。

かくて、『国富論』は、分業による「労働者の技能向上」「仕事を変える時間ロスのゼロ化」「労働生産性を向上させる機械類の発明の促進」といった3つの理由によって労働生産性を向上させると論じ、『産業経済学』は、分業のメリットは「技能の経済」「精神的・肉体的卓越の経済」「発明の経済」であると論じている。「技能の経済」・「発明の経済」は同じであるが、「仕事を変える時間ロスのゼロ化」と「精神的・肉体的卓越の経済」は異なる。『国富論』は、分業により、各人の仕事は単純な作業に還元され、また単

純化された作業がその人の生涯のただ一つの仕事になるので、労働技能は必然的に増進すると論じているが、逆に『産業経済学』は、長時間にわたる労働作業の単調さはきわめて大きな弊害であると論じている。『国富論』とは異なり、『産業経済学』は特化されおらず、多くの業務に利用しうる労働技能と、一つの業務に特化されている労働技能を比較して、特化されていない労働技能は新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができるので、特化されている労働技能より重要であると論じている。

## 5 労働と資本：スミス vs. マーシャル

『国富論』は、モノが労働、資本、土地によって生産される場合、第1に流動資本（「食料品」「材料」「完成品」）が回収される、つまり1つは生産的労働者によって投入された労働の価値（生活維持のための「食料品」：労働者に前払いされた賃金）が回収され、もう1つは投入された「材料」が回収され、さらにもう1つは固定資本を維持するための「完成品」が回収される、第2に資本家に対して利潤が支払われる。第3に地主に対して地代が支払われる、と論じている。

『国富論』は、「節約は、生産的労働者の維持にあてられる基金を増加させることによって、その労働が投下される対象の価値を増加させる労働者の数をふやすものである。したがって節約は、その国の土地と労働の年々の生産物の交換価値を増加させる傾向がある。それは、勤労の追加量を活動させ、その追加量が年々の生産物に追加的価値を与えるのである。」（訳書 第2篇 p.633）と述べている。『国富論』は供給重視の経済学であり、「『節約』（貯蓄）増大→資本（「生産的労働者の維持にあてられる基金」：賃金）の増大→生産的労働者数の増大→GDPの増大」である<sup>5</sup>。『国富論』の最重要テーマはGDPの増大であり、「 $GDP = (GDP / \text{労働量}) \times \text{労働量} = \text{労働生産性} \times \text{労働量}$ 」である。スミスによれば、資本の蓄積は、第1に労働量を増加させ、第2に労働生産性を高めるので、GDPの増大に貢献する。

『産業経済学』は、「労働は資本による扶養と資本からの補助を必要としている。」（訳書 p.20）と述べて「労働を扶養する資本（報酬資本ないし賃金資本）」と「労働を補助する資本（補助資本）」を区別し、労働の量について、「ある地域での労働需要は長期的にはその地域への資本供給の増加をもたらすなんらかの企て以外によっては、増やすことができない。」（訳書 p.21）と述べている。

『産業経済学』は「人間は自分の労働生産物のすべてから当面の享楽を求めることを控え、その一部を将来の労働に役立つ物をつくるために利用する。これらの生産に

<sup>5</sup> 貯蓄したものはいずれ消費され、スミスは、「それ（貯蓄—引用者注）がだれによって消費されるかによって違いが生じる。」（訳書 第2篇 p.633）と述べている。つまり、スミスは、第1に貯蓄が不生産的労働者（「怠惰な客人や家事使用人」）によって消費されるのであれば、あとには何も残されない。第2に貯蓄が生産的労働者（「労働者、製造工、手工業者」）によって消費されるのであれば、スミスは、「この人たちは自分たちの消費の価値を利潤とともに再生産するのである。」（訳書 第2篇 p.634）と述べている。

必要なものを資本とよぶ。」(訳書 p.15) と述べ、財フローと資本ストックを区別していないが、「労働を扶養する資本」の具体例として住居ストックなどを挙げ、「労働を補助する資本」の具体例として道具、機械、工場、その他産業目的のために使用される建物、鉄道、運河、道路、船舶ストックなどをそれぞれ挙げている<sup>6</sup>。

マーシャルは、企業が「労働を扶養する資本」を増やすと労働者は喜ぶが、それは一時的喜びになるかもしれない、逆に、「労働を補助する資本」を増やすと労働者は悲しむが、それはやがて大きな富を生み、労働者を喜ばせるかもしれないと論じている<sup>7</sup>。

かくて、『国富論』『産業経済学』はともに供給重視の経済学であり、「貯蓄増大→資本の増大→生産的労働者数の増大→GDPの増大」である。『国富論』の流動資本のうち「食料品」「完成品」は『産業経済学』の「労働を扶養する資本」「労働を補助する資本」にそれぞれ対応している。

## 6 「スミス vs. マーシャル」の分配

### 6-1 スミスの分配：賃金、利潤、地代

『国富論』は、「地代で生活する人々」「賃金で生活する人々」「利潤で生活する人々」といった3大階級の間には労働の生産物がいかに自然に分配されるのかについて、以下のことを論じている。

- (1) 労働賃金は雇用者(「親方」と被雇用者(「職人」)の間で決定されるものであり、労働者(職人)が受け取る賃金の源泉は「賃金の支払にあてられるファンド」「労働の維持にあてられるファンド」(以下、「賃金ファンド」と略称)と呼ばれ、「親方の生活維持に必要な部分を超える収入」「親方の業務に必要な部分を超える資本」の2種類である。GDPが増大し、賃金ファンドが増大しているところでは、労働需要は増大し、賃金を上昇させる。GDPが停滞し、賃金ファンドが停滞しているところでは、労働者たちの競争と親方たちの利害関係とによって、賃金は普通の人間性を無視しない程度の最低の率にまで引き下げられる。GDPが減少し、賃金ファンドが減少しているところでは、労働需要は減少し、賃金は労働者の最もみじめで乏しい生存水準にまで引き下げられる<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> マーシャル『産業経済学』は、財フローと流動資本ストックを区別せず、「それが使用される生産において、一度の使用によってその役割のすべてを果たす資本」(訳書 p.24)を「流動資本」、  
「なんらかの耐久性を備え、その耐久期間にわたって収益をもたらす資本」(訳書 p.24)を「固定資本」とそれぞれ呼んでいる。

<sup>7</sup> 『産業経済学』は、労働の質について、一国の労働の平均的能率は個々の労働者の肉体的、知性的、精神のおよび道徳的性質に依存していると論じている。

<sup>8</sup> 賃金と人口について、スミスは、「人間にたいする需要は、他のすべての商品にたいする需要と同じように、人間の生産を必然的に左右する。」(訳書 第1篇 p.176)と述べている。つまり、人間繁殖の状態を左右するものは労働に対する需要である。労働需要が絶えず増加するならば賃金は上昇し、賃金上昇は必然的に労働者の結婚・出産を刺激し、増大する労働需要をたえず増大する人口によって満たすことができるようになる。



(2) 資本の利潤は、労働賃金の増大・減少と同一の原因に、すなわち、GDP（社会の富）が増大の状態にあるか、減少の状態にあるかに依存する。つまり、GDPが増大しているときは、賃金率は上昇し、利潤率は下落し、逆にGDPが減少しているときは、賃金率は下落し、利潤率は上昇する。資本の増大は労働の生産力上昇をもたらすことによって賃金率を上昇させ、利潤率を低下させ、商品価格を下落させる。逆に、資本の減少は労働の生産力低下をもたらすことによって賃金率を下落させ、利潤率を上昇させ、商品価格を上昇させる<sup>9</sup>。

(3) 「地代」は「土地の使用にたいして支払われる価格」「借地人がその土地の現実の状態のもとで支払うことのできる最高の価格」（訳書 第1編 p.301）と定義されている。地主は、改良されていない土地に対してさえ地代（「本来の地代」）を要求し、土地の改良は、地主の資本によっても、借地人の資本によってもなされることがあるが、地主は、土地改良はすべて地主の資本でなされたものであるかのように、土地の改良に対して見込まれる報酬（土地改良のために投下された資本の利潤・利子）は「本来の地代」に上乗せされる。

商品生産への投入が労働、資本、土地であるときは、商品の価格は労働者に対する労働賃金、資本提供者に対する資本利潤および地主に対する地代から構成される。スミスは、しかし注意しなければならないことはと云って、賃金・利潤の高い・低い商品価格の高低の原因であるが、逆に地代の高い・低い商品価格の高低の結果であると論じている。すなわち、「商品価格＝賃金＋利潤＋地代」であり、「商品価格＞（賃金＋利潤）」ならばプラスの地代が生じ、「商品価格＜（賃金＋利潤）」ならば地代が生じない、という意味で、地代の高い・低い商品価格の高低の結果である。

スミスによれば、「食（食物）」「衣（衣服）」「住（住居）」は人間の三大欲望であり、食物・衣服・住居はすべて土地からの生産物である。食物は「つねに地代を生じる土地生産物」であり、衣服・住居は「ときには地代を生じ、ときには地代を生じない土地生産物」である。

地代で生活する人、賃金で生活する人、利潤で生活する人はあらゆる文明社会の3つの大きな基本的構成要素をなす階級である。第1に賃金で生活する人の利害は社会の一般的な利害と密接不可分に結びついている。第2に利潤で生活する人（雇主：商人、親方製造業者など）の利害は、公共社会の利害と対立することさえある。つまり、市場を拡大しかつ競争を制限することは利潤で生活する人の利益である。市場を拡大することは公共社会の利益と十分に一致することがしばしばあるが、競争を制限する

---

<sup>9</sup> 大きい資本は利潤率は低いが資本増大スピードは速く、小さい資本は利潤率は高いが資本増大スピードは遅い。

ことはつねに公共社会の利益に反する。第3に地代で生活する人は無知であり、その利害は社会の一般的な利害と密接不可分に結びついている。

## 6-2 マーシャルの分配：「稼得・利子基金」 vs. 「賃金・利潤基金」

『産業経済学』は、一国の総純所得は、事業経営を含むあらゆる類の労務の稼得、資本に対する利子、土地ないしその他の自然的ないし人為的に限りのある資産の使用によって得られる地代（レント）、国家に支払われる税金から成っているとした上で、一国の所得（総純所得）の分配を受ける人として、労働によって所得を得る人々、資本家、地主、国家の4つを取り上げている<sup>10</sup>。

『産業経済学』は、土地ないしその他の自然的ないし人為的に限りのある資産の使用によって得られる地代（レント）、国家に支払われる税金を所与として、賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）、事業経営の稼得、資本に対する利子の間の分配を取り上げている。

### (1) マーシャルの正常価値の理論と「稼得・利子基金」

マーシャルの「正常価値の理論」では、賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）と事業経営の稼得（「監督賃金」）の合計を「稼得」と呼び、「稼得」と「利子」の間の分配を取り上げている。稼得は「勤労の種々の報酬」「肉体的ないし精神的な仕事に報いる分け前」、利子は「節欲の報酬」「節欲に報いる分け前」とそれぞれみなされている<sup>11</sup>。

「稼得」（勤労に対する正常稼得）と「利子」（資本に対する正常利子）は「稼得・利子基金」の総額と「稼得・利子基金」の分配方式によって決定される。勤労に対する正常稼得は、未熟練労働、熟練労働、事業経営能力の間で分配される<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> マーシャルは、上記4つの階級とは区別された階級として「消費者」を取り上げているが、「なんらかの経済変動の損失や利得を受ける、特定の消費者階層一般なるものは存在しない。（中略）そのような、すべての損失とすべての利得は、稼得の受領者、資本家、地主および国家の間に、配分されるはずである。」（訳書 p.120）と論じている。そして、「もちろん被扶養者階層—子供、病人、貧民その他—は存在するけれども、かれらが消費するものは、他人に依存しない所得を有する他の人々の意志によって、分け与えられるものであり、経済法則によるものではない。他人の扶養に依存している者たちの消費は、実のところ他人の消費の一部である。」（訳書 p.121）と述べている。つまり、「特定の消費者階層一般」は存在しないが、消費者はどこにでもいるのである。

<sup>11</sup> 『産業経済学』は、「かれが受け取ることを期待している利子は、投資された資本量（大工であれば、道具と材料の購入額—引用者注）と年利子率に依存するだけでなく、また財の生産のためにかれが行ったそれぞれの支出と、かれがそれらの財の価格を受け取る間にかかる時間間隔にも依存する。」（訳書 p.94）と述べている。

<sup>12</sup> マーシャルは、「稼得・利子基金」の総額は、「農業・鉱業上の富の自然的資源の規模と肥沃さ」「農業、鉱業、製造業の技術上の進歩」「自然と技術が人、財、情報を素早く、かつ安価にある場所から他の場所へ運ぶために用意した諸手段」に依存していると論じている。

## (2) マーシャルの市場価値の理論と「賃金・利潤基金」

マーシャルの「市場価値の理論」では、事業経営の稼得（「監督賃金」）と資本利子の合計を「利潤」と呼び、「賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）」と「利潤」の間の分配を取り上げている。マーシャルは、「かれが資本のために得る利子は、実際には、かれがその働きのために得る経営の稼得から、はっきりと区別されるものではない。両者は一緒にして利潤の名のもとに考慮される。」（訳書 p.147）と述べ、事業者（企業経営者）は一定の利潤率を予想していると論じている<sup>13</sup>。

『産業経済学』は、他の事情にして等しければという前提で、「資本の援助を求める労働間の競争 vs. 労働の援助を求める資本間の競争」と稼得・利子を論じている。ここでの「他の事情にして等しければ」は資本装備率一定のことを意味し、マーシャルは「文明の進歩とともに、勤労の資本の援助にたいする需要は、その国の人口増と関わりなく、増加してゆく。なぜなら文明の進歩とともに、人が目的達成のための手段として用いる、機械その他のものの量および額が絶えず上昇してゆくからである。」（訳書 p.148）と述べ、資本装備率は文明の進歩とともに上昇すると論じている。

### (1) 資本の援助を求める労働間の競争

資本の増加は、資本の援助を求める労働間の競争を低め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げ、他方で、人口の増加は、資本の援助を求める労働間の競争を高め、稼得の犠牲の下に、利子を引き上げる。

### (2) 労働の援助を求める資本間の競争

資本の増加は、労働の援助を求める資本間の競争を高め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げ、他方で、資本の減少は、労働の援助を求める資本間の競争を低め、稼得の犠牲の下に、利子を引き上げる。

かくて、第1に『国富論』は「地代で生活する人々」「賃金で生活する人々」「利潤で生活する人々」といった3大階級を、『産業経済学』は労働によって所得を得る人々、資本家、地主、国家の4つの階級を取り上げている。また、マーシャルによれば、「特定の消費者階層一般」は存在しないが、消費者はどこにでもいるのである。第2に『国富論』は賃金・利潤の高い・低い商品価格の高低の原因であり、地代の高い・低い商品価格の高低の結果であると論じているが、『産業経済学』は、地代（レント）、

---

<sup>13</sup> マーシャルは「理論 vs. 実際」の対立軸の中で、実際上は「資本に対する利子」と「経営の稼得」の区別が困難であるとしても、理論上は「資本に対する利子」と「経営の稼得」を区別する必要があると論じている。

税金を所与として、賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）、事業経営の稼得、資本に対する利子の間の分配を取り上げている。第3に『産業経済学』の用語法は『国富論』とは異なり、一方で賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）と事業経営の稼得（「監督賃金」）の合計を「稼得（勤労に対する正常稼得）」と呼び、「稼得 vs. 利子（資本に対する正常利子）」の間の分配、他方で事業経営の稼得（「監督賃金」）と資本利子の合計を「利潤」と呼び、「賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得） vs. 利潤」の間の分配を取り上げている。第4に『国富論』では、資本の増大は労働の生産力上昇をもたらすことによって賃金率を上昇させ、利潤率を低下させ、商品価格を下落させる。逆に、資本の減少は労働の生産力低下をもたらすことによって賃金率を下落させ、利潤率を上昇させ、商品価格を上昇させる。

『産業経済学』では、資本の増加は、一方で資本の援助を求める労働間の競争を低め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げ、他方で労働の援助を求める資本間の競争を高め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げる。

## 7 労働と賃金：マーシャルの「未熟練労働 vs. 熟練労働」

『産業経済学』は、労働に対する対価として、「賃金」と「純利益」を区別し、

純利益 = 賃金 + その他の特殊利益の貨幣等価分 - その他の特殊不利益の貨幣等価分

と定義している。労働が危険、不健康、不潔などであるとき、それを補償するために割増賃金が支払われるが、それは「その他の特殊不利益の貨幣等価分」である<sup>14</sup>。

『産業経済学』は、「賃金の上昇が、家屋、食事の内容、教育の改善、したがって人々の労働能率の向上をもたらす場合には、人々を絶えず向上させるであろう。」（訳書 p.126）と述べ、賃金の上昇は労働の質を高め、賃金の下落は労働の質を低めると論じている。また、賃金の削減によって、労働者は非能率になり、労働による生産物は減少するので、「賃金から取り上げたものによっては、誰も得をせず、労働者にとっても世界にとっても損失である。」（訳書 p.126）と述べ、賃金の削減は資本家の取り分を減らすことがあると論じている。

---

<sup>14</sup> マーシャルによれば、ある職業の「純利益」を構成する賃金はその業種で平均的な成功を収めている者の、1年ないし数年において稼得される賃金である。ある職業の「純利益」を構成する利益は雇用の安定性、職業の成功の可能性、仕事の健全性、安楽さ、社会的地位であり、不利益は雇用の不安定性、職業の失敗の可能性、仕事の不快さ（不潔さ、肉体的・精神的緊張、不安や単調さ）である。

## (1) 「未熟練労働 vs. 熟練労働」の需要

マーシャルは、「未熟練労働の需要は、ものを生産する場合であれ、直接人々の欲求に奉仕するばあいであれ、その援助を求める競争に依存する。」(訳書 p.158)と述べ、未熟練労働に対する需要は、第1に「労働を扶養する資本(報酬資本ないし賃金資本)」「労働を補助する資本(補助資本)」のそれぞれの量が増加するごとに増大する、第2に生産工程において未熟練労働の援助を求めて争う、事業経営と熟練労働の量が増加するごとに増大する、と論じている。

マーシャルは、「各種熟練労働の需要は、その援助を求める競争に依存する。」(訳書 p.159)と述べ、熟練労働に対する需要は、第1に「労働を扶養する資本(報酬資本ないし賃金資本)」「労働を補助する資本(補助資本)」のそれぞれの量が増加するごとに増大する、第2に熟練労働の援助を求めて争う、未熟練労働と業経営能力の量が増加するごとに増大する、と論じている。

## (2) 「未熟練労働 vs. 熟練労働」の供給

『産業経済学』は、未熟練労働の供給要因と熟練労働の供給要因を区別し、未熟練労働の供給は両親が子供に与えることができる生活必需品(食料、衣料など)に依存し、熟練労働の供給は教育投資に依存していると論じている。

マーシャルは「子供のための健全な肉体的、知性的、道徳的教育」(訳書 p.35)を行うことができる所得水準を「安楽基準」と呼び、「安楽基準=未熟練労働の正常賃金」である。未熟練労働の賃金>未熟練労働の正常賃金(安楽基準)のときは人口・未熟練労働供給は増大し、未熟練労働の賃金<未熟練労働の正常賃金(安楽基準)のときは人口・未熟練労働供給は減少する<sup>15</sup>。

『産業経済学』は「労働需要の増加にともなう賃金の上昇は、それが安楽基準の上昇を引き起さないかぎり、一時的なものであろう。安楽基準の上昇をとまなうばあいには、賃金上昇は永続的なものとなり、正常賃金が引きあげられるだろう。」(訳書 p.159)と述べている。「未熟練労働の賃金>未熟練労働の正常賃金(安楽基準)」による未熟練労働供給の増大は、未熟練労働の、資本、熟練労働の援助を求める競争を激化させ、資本利子、熟練労働の賃金を引き上げ、未熟練労働の賃金を引き下げる。あるいは、未熟練労働供給の増大は、資本、熟練労働の、未熟練労働の援助を求める競争を減退させ、資本利子、熟練労働の賃金を引き上げ、未熟練労働の賃金を引き下げる。逆に、「未熟練労働の賃金<未熟練労働の正常賃金(安楽基準)」による未熟練労働供給の減少は、資本、熟練労働の、未熟練労働の援助を求める競争を激化させ、資本利子、熟練労働の賃金を引き下げ、未熟練労働の賃金を引き上げる。あるいは、未

<sup>15</sup> 『産業の経済学』は、未熟練労働一般の供給は「純利益」(=賃金+その他の特殊利益の貨幣等価分-その他の特殊不利益の貨幣等価分)の増加関数であると論じている。

熟練労働供給の減少は、未熟練労働の、資本、熟練労働の援助を求める競争を減退させ、資本利子、熟練労働の賃金を引き下げ、未熟練労働の賃金を引き上げる。

マーシャルは、教育の進歩により、第1に熟練労働の供給は、未熟練労働の供給よりも、急速に増加しつつある、第2に事業経営能力の供給は、比較的低い種類の熟練労働の供給より急速に増加しつつある、と論じている。

### (3) 「未熟練労働 vs. 熟練労働」の賃金

『産業の経済学』は、労働者の異なる階級間には完全な区別がなされているので、「各階層の賃金は、(中略)その国の人口全体の増加によるよりもむしろ、各階層の増加によって、規制されてきた。」(訳書 p.132)と述べている。「未熟練労働 vs. 熟練労働」の賃金で言えば、熟練労働者の賃金は未熟練労働者の賃金より高い。労働者が未熟練労働者ではなく、熟練労働者であるには生得的資質を有している、あるいは熟練労働者になるには教育を受けている必要がある。マーシャルは熟練労働者の高賃金が生得的資質を原因とするとき、生得的資質による高い賃金を一種の地代とみなし、また熟練労働者の高賃金が教育を原因とするとき、教育による高い賃金を教育に投下された資本に対する一種の利潤とみなしている。

## 8 「スミス vs. マーシャル」の賃金格差

### 8-1 スミスの賃金格差

『国富論』は、「人間の本性が軽薄で無節操だということについていろいろといわれているが、人間という荷物は、あらゆるもののなかでいちばん輸送が困難だということが経験上明白である。」(訳書 第1篇 p.167)と述べ、労働移動の困難性が賃金の地域間格差を生んでいると論じている。

#### (1) 賃金の格差：職業自体の性質から

スミスは、さまざまな職業の賃金格差を生む要因として「職業自体が快適であるかないか」「それらの職業を習得するのが簡単で安上りかそれとも困難で費用がかかるか」「それらの職業における雇用が安定しているかないか」「その職業に従事する人たちによせられる信頼度が大きい小さいか」「そうした職業において成功する可能性があるかないか」といった5つを挙げている。

すなわち、第1に各職業の賃金は、その職業が「やさしい vs. 苦しい」「清潔 vs. 不潔」「名誉 vs. 不名誉」によって異なる。やさしい・清潔な・名誉な職業の賃金は低く、苦しい・不潔な・不名誉な職業の賃金は高い。第2に各職業の賃金は、その職業の習得の「簡単 vs. 困難」「低費用 vs. 高費用」によって異なる。習得の簡単・低費用の職業の賃金は低く、習得の困難・高費用の職業の賃金は高い。第3に各職業の賃金は、

雇用の「安定 vs. 不安定」によって異なる。雇用が安定していれば賃金は低く、不安定であれば賃金は高い。第4に各職業の賃金は、その職業に従事する人たちに寄せられる「信頼度が高い vs. 信頼度が低い」によって異なる。職業従事者に対する信頼度が低ければ賃金は低く、高ければ賃金は高い。第5に各職業の賃金は、その職業における「成功の可能性の高い vs. 成功の可能性の低い」によって異なる。成功の可能性の高ければ賃金は低く、低ければ賃金は高い。

## (2) 賃金の格差：ヨーロッパ諸国の政策から

スミスは、ヨーロッパ諸国の政策は「最も完全な自由がある」という条件を満たさず、各職業の利益・不利益の不均等化をさらに拡大させている要因として、「ある種の職業における競争を制限して、そうでなければこれらの職業に就きたがる人々の数を制限すること」「他の職業での競争を、そうでなければ自然に行なわれる以上に増大させること」「職業から職業へ、地方から地方への、労働と資本の自由な流通を妨げること」といった3つを挙げている。

## 8-2 マーシャルの賃金格差

『産業経済学』は、高賃金・低賃金の理由を以下のように論じている。

### (1) 高賃金の2つの理由

第1に仕事が特殊訓練を経た技能を要する場合、第2に仕事がどの職業においても良い市場を見出す高い知的資質と道徳的資性を要する場合、労働者はきわめて高い賃金を受領することができる。

### (2) 低賃金の2つの理由

マーシャルは、第1に、最も嫌がられている仕事は不快（不潔、肉体的・精神的緊張、不安、単調）であるにもかかわらず、賃金は低いことについて、「あらゆる仕事のなかで、もっとも嫌がられているものは、主として、他のいかなる職をも得ることができない者によって行なわれ、したがってその賃金は、そのことの結果として、その仕事の不快さにもかかわらず、低い。」（訳書 p.135）と述べている。第2に、学識を要する専門職の賃金が低いことについて、「学識を要する専門職は、そこで得られる稼得とは別に、このような大きな魅力をもっているため、かれらの平均稼得は、同等に訓練された能力と勤勉によって、他の職業において得ることができるものより、はるかに低額である。」（訳書 p.136）と述べ、学識を要する専門職は社会的地位が高く、きわめて高い榮譽をもたらすので、賃金は低いと論じている。

かくて、賃金格差の議論についての「スミス vs. マーシャル」は、第1に、スミスは「やさしい・清潔な職業の賃金は低く、苦しい・不潔な職業の賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不潔、肉体的・精神的緊張、単調）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第2に、スミスは「名誉な職業の賃金は低く、不名誉な職業の賃金は高い」と論じ、同様にマーシャルは「学識を要する専門職は社会的地位が高く、きわめて高い榮譽をもたらすので、賃金は低い」と論じている。第3に、スミスは「習得の簡単・低費用の職業の賃金は低く、習得の困難・高費用の職業の賃金は高い」と論じ、同様にマーシャルは「仕事が特殊訓練を経た技能を要する場合、賃金は高い」と論じている。第4に、スミスは「雇用が安定していれば賃金は低く、不安定であれば賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不安）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第5に、スミスは「職業従事者に対する信頼度が低ければ賃金は低く、高ければ賃金は高い」と論じ、同様にマーシャルは「高い知的資質と道徳的資性を要する場合は賃金は高い」と論じている。第6に、スミスは「成功の可能性の高ければ賃金は低く、低ければ賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不安）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第7にスミスは労働移動の困難性が賃金の地域間格差を生んでいると論じ、同様にマーシャルは「ある人をある特定の地の、ある職業に結びつけ、その市場賃金に影響を与える純利益の中には、個人的友好や愛情、さらに昔からの交際を最も重要なものとしてつけ加えなければならない。」（訳書 p.211）と論じている。第8に『国富論』は「賃金」を労働に対する対価として一括しているが、『産業経済学』は、労働に対する対価として、「賃金」と「純利益」を区別し、「純利益＝賃金＋その他の特殊利益の貨幣等価分－その他の特殊不利益の貨幣等価分」と定義している。

## 9 「スミス vs. マーシャル」の資本・利子

### 9-1 スミスの資本・利子

『国富論』は、「日常の市場利子率が通常の純利潤率にたいしてとるべき割合は、利潤が上昇または下落するのにおうじて、必然的に変動する。」（訳書 第1篇 p.210）と述べている。すなわち、利子は利潤から支払われ、「利子／利潤」は当時の英国では通常は50%であったが、利潤率がきわめて低いときは50%を下回り、利潤率がきわめて高いときは50%を上回った。スミスは、「事業が借入金で営まれる場合には、純利潤の半分が利子にまわるというのが妥当であろう。」（訳書 第1篇 p.210）と述べ、純利潤の半分は貸手に、残りの半分は借手（事業者）に帰属すると指摘し、借手（事業者）に帰属する純利潤は「事業リスク負担に対する報償」「この資本を用いる煩わしさに対する報償」であると論じている。

スミスは、平均利潤率が現在どれだけであり、過去はどれだけであったかを正確に



定めるのは不可能なことであるが、市場利子率の推移によって、利潤率の推移についてある判断を作り上げることは可能であると論じている。すなわち、市場利子率が下がっていると利潤率も下がっている、市場利子率が上がっていると利潤率も上がっていると推論できうると論じている。

#### (1) 最低の利潤率 vs. 最高の利潤率：総利潤率＝純利潤率＋リスクプレミアム

スミスによれば、「総利潤率＝純利潤率（正味の利潤率）＋『特別の損失を償うために保留されるもの』」、つまり「総利潤率＝純利潤率＋リスクプレミアム」であり、スミスは、第1に「最低の通常利潤率は、資本の使用にはつきものの偶発的な損失を償うにたるものよりも、つねにいくぶん大きめでなければならない。」（訳書 第1篇 p.208）と述べている。上記のリスクプレミアム（「資本の使用にはつきものの偶発的な損失を償うにたるもの」）は事業のリスクプレミアム（借手のリスクプレミアム）であり、事業者（借手）が支払うことのできる利子率は純利潤率（正味の利潤率）にのみ比例している、第2に「最高の通常利潤率とは、大部分の商品の価格のなかで、土地の地代となるべき部分全部を食ってしまうような大きさであり、（中略）労働にたいしては、労働が支払われるときの最低率、つまり労働者のぎりぎりの生計に足りる賃銀が支払える分だけを残しておくような大きさである。」（訳書 第1篇 pp.209-210）と述べている。つまり、「GDP＝総賃金＋総利潤＋総地代」であり、「最高の利潤率＝（GDP－最低の総賃金）／総資本」と論じている。

#### (2) 最低の利子率 vs. 最高の利子率：総利子率＝純利子率＋リスクプレミアム

スミスによれば、「総利子率＝純利子率（正味の利子率）＋『特別の損失を償うために保留されるもの』」、つまり「総利子率＝純利子率＋リスクプレミアム」であり、スミスは、「最低の通常利子率は、慎重な配慮をもって貸し付けた場合、なお貸付につきものの偶発的な損失を償うにたるものよりも、つねにいくぶん大きめでなければならない。」（訳書 第1篇 pp.208-209）と述べている。上記のリスクプレミアム（「特別の損失を償うために保留されるもの」）は貸手のリスクプレミアムであり、スミスによれば、貸手が貸手のリスクプレミアムを上乗せしない貸出は「慈善や友情が唯一の動機」の貸出である。

### 9-2 マーシャルの資本・利子

『産業経済学』は、資本の需要（投資）は自然資源、生産人口数、生産技術に依存し、資本の供給（貯蓄）は利子率にわずかに依存していると指摘し、「資本需要（投資）＝資本供給（貯蓄）」によって「正常利子率」が決定されると論じている。

マーシャルによれば、「貯蓄意欲」は次の5つのものに依存している。

(i) 知性

より高度の教育を受ければ、未来により関心をもつようになり、「現在重視 vs. 将来重視」についての尺度である純粋時間選好率は小さくなり、貯蓄意欲は高まる。

(ii) 共感

共感（他人に対する愛情）の高まりは貯蓄意欲を高める。

(iii) 立身出世の望み

マーシャルは「恐いのは運の不均等ではなくむしろ不変性である。」（訳書 p.48）と述べ、立身出世の望みは貯蓄意欲を高めると論じている。

(iv) 富の所有による社会的利益

富の所有による社会的利益の増大は貯蓄意欲を高める<sup>16</sup>。

(v) 政治および商業上の安全

マーシャルは「貯蓄する者は、自分とその家族が安全にこの貯蓄の果実を楽しめることを望んでいる。」（訳書 p.49）と述べ、政治上・商業上の安全の高まりは貯蓄意欲を高めると論じているが、逆に、政治・商業の安定性は貯蓄意欲を低めるであろう。

マーシャルは、利子率は「自由な節欲の報酬」（訳書 p.52）であると述べ、「資本蓄積」を貯蓄・投資の2つの意味で用いている。マーシャルは、投資は利潤率にプラスと利子率（資本の所有者がそれを他人に貸出すことにより受け取ることのできる）にマイナスに依存していると論じ、貯蓄については「過去の歴史を見、現在を観察すると、老令や家族のためを思って備えをするかどうかを決定するのは、貯蓄によって得られるはずの利子率であるよりは、むしろそれ以上にその人の気質であることが判明する。」（訳書 p.52）と述べながら、貯蓄は利子率にプラス、マイナスいずれにも依存するが、ネットではしばしばごく僅かの程度ではあるが、プラスに依存していると論じている<sup>17</sup>。

かくて、『国富論』は、利子は利潤から支払われ、「総利子率＝純利子率（正味の利子率）＋『特別の損失を償うために保留されるもの』」、つまり「総利子率＝純利子率＋貸手のリスクプレミアム」としてしているが、『産業経済学』では、「正常利子率」は「資本需要（投資）＝資本供給（貯蓄）」によって決定される。

<sup>16</sup> マーシャルは「誇示の欲望が貯蓄を減退させる。」（訳書 p.48）と述べ、つまり「見せびらかし」による消費支出増大が貯蓄意欲を低めると論じている。

<sup>17</sup> 利子率から貯蓄・投資への影響とは逆に、貯蓄・投資から利子率への影響について、マーシャルは、収穫逓減法則が作用する結果として、資本蓄積は利子率の下落をもたらすと論じている。

## 10 おわりに

本稿では、スミス『国富論』とマーシャル『産業経済学』に基づいて、「スミス vs. マーシャル」を比較検討し、以下のことを明らかにした。

- (1) 「富」概念の「スミス vs. マーシャル」の違いは、スミスは富を「直接の消費のために留保される資財」「流動資本」「固定資本」に分類し、マーシャルは「物的富」「人間的あるいは非物的富」に分類していることであるが、スミスの「直接の消費のために留保される資財」「流動資本」「固定資本の一部」はマーシャルの「物的富」であり、スミスの「固定資本の一部」はマーシャルの「人間的あるいは非物的富」である。マーシャルの「人間的あるいは非物的富」の中の「精神的、道徳的慣習」（労働者の精神力、道徳力）はスミスの『道徳情操論』をスミス以上に受け継ぐ概念である。
- (2) 「生産的労働 vs. 不生産的労働・非生産的労働」概念の違いは、第1に『国富論』は、モノの生産のみを価値の創造とみなし、サービスの生産を価値の創造とみなしていないが、『産業経済学』はモノの生産とサービスの生産をともに価値の創造とみなしている。第2に『国富論』は、モノを生産する労働を「生産的労働」、モノを生産しない労働を「不生産的労働」とそれぞれ呼んでいるが、『産業経済学』は、モノ・サービスを直接的に生産する労働を「生産的労働」、「人間的あるいは非物的富」を生産することによってモノ・サービスを間接的に生産する労働を「非生産的労働」とそれぞれ呼んでいる。第3に『国富論』は生産・運送・販売のうち生産のみを「生産的」とみなしているが、『産業経済学』は生産・運送・販売のすべてを自然によって与えられたものを、人間にとってより有利なものに変えることに貢献しているという意味で「生産的」とであるとみなしている。
- (3) 「分業のメリット・デメリットと『特化されている労働技能 vs. 特化されていない労働技能』」の違いは、第1に『国富論』は、分業による「労働者の技能向上」「仕事を変える時間ロスのゼロ化」「労働生産性を向上させる機械類の発明の促進」といった3つの理由によって労働生産性を向上させると論じ、『産業経済学』は、分業のメリットは「技能の経済」「精神的・肉体的卓越の経済」「発明の経済」とであると論じている。「技能の経済」・「発明の経済」は同じであるが、「仕事を変える時間ロスのゼロ化」と「精神的・肉体的卓越の経済」は異なる。第2に『国富論』は、分業により、各人の仕事は単純な作業に還元され、また単純化された作業がその人の生涯のただ一つの仕事になるので、労働技能は必然的に増進すると論じているが、逆に『産業経済学』は、長時間にわたる労働作業の単調さはきわめて大きな弊害であ

ると論じている。第3に『国富論』とは異なり、『産業経済学』は特化されておらず、多くの業務に利用しうる労働技能と、一つの業務に特化されている労働技能を比較して、特化されていない労働技能は新しくかつ困難な問題に、正しく、素早く対処してゆくことができるので、特化されている労働技能より重要であると論じている。

(4) 「労働と資本」の違いは、『国富論』『産業経済額』はともに供給重視の経済学であり、「貯蓄増大→資本の増大→生産的労働者数の増大→GDPの増大」である。『国富論』の流動資本のうち「食料品」「完成品」は『産業経済学』の「労働を扶養する資本」「労働を補助する資本」にそれぞれ対応している。

(5) 分配の違いは、第1に『国富論』は「地代で生活する人々」「賃金で生活する人々」「利潤で生活する人々」といった3大階級を、『産業経済学』は労働によって所得を得る人々、資本家、地主、国家の4つの階級を取り上げている。また、マーシャルによれば、「特定の消費者階層一般」は存在しないが、消費者はどこにでもいるのである。第2に『国富論』は賃金・利潤の高い・低い商品価格の高低の原因であり、地代の高い・低い商品価格の高低の結果であると論じているが、『産業経済学』は、地代（レント）、税金を所与として、賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）、事業経営の稼得、資本に対する利子の間の分配を取り上げている。第3に『産業経済学』の用語法は『国富論』とは異なり、一方で賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得）と事業経営の稼得（「監督賃金」）の合計を「稼得（勤労に対する正常稼得）」と呼び、「稼得 vs. 利子（資本に対する正常利子）」の間の分配、他方で事業経営の稼得（「監督賃金」）と資本利子の合計を「利潤」と呼び、「賃金（事業経営の稼得を除く、すべての種類の労働の稼得） vs. 利潤」の間の分配を取り上げている。第4に『国富論』では、資本の増大は労働の生産力上昇をもたらすことによって賃金率を上昇させ、利潤率を低下させ、商品価格を下落させる。逆に、資本の減少は労働の生産力低下をもたらすことによって賃金率を下落させ、利潤率を上昇させ、商品価格を上昇させる。

『産業経済学』では、資本の増加は、一方で資本の援助を求める労働間の競争を低め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げ、他方で労働の援助を求める資本間の競争を高め、利子の犠牲の下に、稼得を引き上げる。

(6) 賃金格差は、第1に、スミスは「やさしい・清潔な職業の賃金は低く、苦しい・不潔な職業の賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不潔、肉体的・精神的緊張、単調）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第2に、スミスは「名誉な職業の賃金は低く、不名誉な職業の賃金は高い」と論じ、同様にマ

ーシャルは「学識を要する専門職は社会的地位が高く、きわめて高い榮譽をもたらすので、賃金は低い」と論じている。第3に、スミスは「習得の簡単・低費用の職業の賃金は低く、習得の困難・高費用の職業の賃金は高い」と論じ、同様にマーシャルは「仕事が特殊訓練を経た技能を要する場合、賃金は高い」と論じている。第4に、スミスは「雇用が安定していれば賃金は低く、不安定であれば賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不安）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第5に、スミスは「職業従事者に対する信頼度が低ければ賃金は低く、高ければ賃金は高い」と論じ、同様にマーシャルは「高い知的資質と道徳的資性を要する場合は賃金は高い」と論じている。第6に、スミスは「成功の可能性の高ければ賃金は低く、低ければ賃金は高い」と論じているが、マーシャルは「不快（不安）であるにもかかわらず、賃金は低い」と論じている。第7にスミスは労働移動の困難性が賃金の地域間格差を生んでいると論じ、同様にマーシャルは「ある人がある特定の地の、ある職業に結びつけ、その市場賃金に影響を与える純利益の中には、個人的友好や愛情、さらに昔からの交際を最も重要なものとしてつけ加えなければならない。」（訳書 p.211）と論じている。第8に『国富論』は「賃金」を労働に対する対価として一括しているが、『産業経済学』は、労働に対する対価として、「賃金」と「純利益」を区別し、「純利益＝賃金＋その他の特殊利益の貨幣等価分－その他の特殊不利益の貨幣等価分」と定義している。

#### 【参考文献】

- Marshall,A. and M.P.Marshall, *The Economics of Industry*, London : Macmillan and Co. Second Edition,1881（橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部、1985年3月）。
- Smith,A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*,5th. edition,London,1789（大河内一男監訳『国富論 I,II,III』（中公文庫）、中央公論新社、1978年4月）。
- 滝川好夫『アベノミクスと道徳経済』神戸大学経済経営研究所研究叢書 75、2015年3月。
- 滝川好夫『アダム・スミスを読む、人間を学ぶ。－『道徳情操論』のエッセンス』ミネルヴァ書房、2022年9月。